

刺網漁業による本種の資源管理の可能性は、成長に伴って両漁法の漁場外に分布域を変える種の生態的特徴から、漁業者の資源管理意欲の向上という視点で難しいと判断された。

## 増 殖 室

### ミミガイ類の種苗生産及び養殖技術開発試験

佐多忠夫・中村博幸・吉里文夫・長松俊樹

ミミガイはミミガイ科に属する巻き貝で、トコブシ、アワビ類に比べて、成長が早く、可食部分の割合が多い。漁協や漁業者からの種苗生産、養殖技術開発試験の要望がある。そこで、ミミガイの種苗生産、養殖技術開発試験を開始した。

ミミガイの種苗生産試験を2002年5月と11月に行った。ベリジャー幼生約8,000個体を、波板を設置した0.5トンパンライト水槽に収容したが稚貝を得ることは出来なかった。また、11月の試験は産卵を確認出来なかった。

ミミガイの殻長と体重の関係式は次式が得られた。

$$Y = 0.2696 X^{2.872} (R^2 = 0.9076)$$

Y：殻長(cm)， X：体重(g)

### スギ等種苗量産技術開発試験

中村博幸・佐多忠夫・吉里文夫・長松俊樹

昨年度に引き続き、スギの種苗量産技術開発試験を行った。今年度は、親魚を栽培漁業センターへ移管したため、栽培漁業センターで得られた受精卵を搬入し、種苗生産を実施した。1回次は、5月18日に125万粒の受精卵を輸送し、913千尾のふ化仔魚を得た。S型ワムシ、アルテミア、配合飼料、冷凍コベを用いて生産を行った結果、約4.1万尾の種苗を取り上げることが出来た。2回次は7月30日に137万粒の受精卵を輸送し、29万尾のふ化仔魚を得ることが出来た。1回次同様生産を行った結果、約6.7千尾の種苗を取り上げた。また今年度は、養殖漁家に初めて、約2.5万尾の種苗の出荷を行うことが出来た。

### スギ養殖試験（スギ・トコブシ養殖推進事業）

中村博幸・佐多忠夫・吉里文夫・長松俊樹

昨年度に引き続き、秋以降に導入したスギ種苗の成長特性を調査するため、県内の養殖場で飼育試験を行った。平成13年10月から飼育試験を開始した結果、約11～12ヶ月で平均体重が2kgを越える

ことがわかった。最も成長の良かった養殖場で、約14ヶ月間で平均体重が4.5 kgに達した。また、日間給餌率を夏場の高水温期において1.5%、22～23℃以下に1%以下の方が、餌料転換効率は良くなることがわかった。

### スギ・トコブシ養殖推進事業（トコブシ）

佐多忠夫・中村博幸・吉里文夫・長松俊樹

トコブシはミミガイ科に属する巻き貝で、アワビに比べ小型であるが、台湾で盛んに養殖が行われている。当場は平成9年に台湾よりトコブシを導入し、種苗生産、養殖技術の開発を実地してきた。開発された技術を活用し、水産業普及センターが事業化レベル規模で養殖を漁協等へ委託し、事業化を促進するとともに、技術の移転の推進を図る。委託試験に供給するトコブシを確保するため種苗生産と中間育成を実施した。

トコブシの種苗生産と中間育成を行い、糸満漁協、北谷漁協、石川漁協、名護漁協および板馬養殖センターに平均殻長28.3～29.0 mmの稚貝を56,000個体と平均殻長20.8～22.5 mmを144,000個体出荷した。

大型群は、ふ化から約11ヶ月で殻長52 mmの出荷サイズになり、早い成長を示した。

### モズク類に対する抗菌剤3種の生育阻害試験

諸見里聰・島袋博文

オキナワモズク盤状体やイトモズク糸状体を健全な状態で長期保存するため、培地に抗菌剤を入れて混入する微生物を制御する必要がある。しかし、抗菌剤は種類、濃度によって藻類の生育が阻害することが知られており、対象種ごとに生育阻害の有無を確認する必要がある。本試験はペニシリン、ストレプトマイシン、クロラムフェニコールを用いて盤状体と糸状体の生育を調査した。

本試験の結果、ペニシリンとストレプトマイシンは高濃度で生育を阻害し、クロラムフェニコールは低濃度で生育を阻害するため問題があることが示された。

### モズク養殖漁場を形成する環境要因に関する調査研究（概要）（平成14年度沿岸漁場整備開発調査委託事業）

諸見里聰

モズク養殖漁場の現行漁場規模や潜在漁場の推定、漁場の質判別に関する手法の応用開発を目的として、航空写真解析、GISシステムを用いた調査を平成13年度に引き続き行った。今年度は県下最大漁場である勝連・与那城漁場と知念漁場を対象に調査し、漁場形成要因の解析を行った。

### 魚類防疫体制推進整備事業

杉山昭博・熊谷明子

魚病の発生及び蔓延を阻止し魚病被害を軽減させるとともに、食品として安全な養殖魚生産の確保をはかり、もって水産増養殖の健全な発展及び養殖漁家経営の安定に資する。

各種防疫対策会議を開催した。養殖管理の巡回指導、水産用医薬品適正使用指導、医薬品残留実態調査を行った。県内技術講習会を実施した。特定疾病対策として、県内での発生モニタリング調査と緊急対策を実施した。

### 養殖魚介類の耐病性試験

杉山昭博・熊谷明子

魚介類の種苗生産、養殖時に発生する疾病を調査研究して有効な対策を検討する。

平成14年度水産試験場で診断した数は合計162件であった。特に本年度はイリドウイルス病とVNN検査が多く、5月に台湾から輸入されたマルコパン種苗で始めて陽性個体を確認した。また、クルマエビに対する銅イオンの影響を調べた。クルマエビ養殖場におけるアンモニア量、有機炭素量、およびクロロフィル量を調べた。

### 特定海域海産生物放射能調査

佐多忠夫・熊谷明子・吉里文夫

本調査は独立行政法人水産総合研究センター中央水産研究所の「特定海域海産生物放射能調査」委託事業実施要領に基づき、昭和47年度から継続実施している。アメリカの原子力軍艦が寄港するハワイ